

ヨブ記20-24章「悪者の繁栄」

1A 新たな疑問 20-21

1B 悪者の速やかな滅び 20

2B 生きながらえる悪者 21

2A 神への訴え 22-24

1B 富者の虐げ 22

2B 反応しないヨブ 23-24

1C 神との討論 23

2C 正義のない世界 24

本文

ヨブ記 20 章を開いてください。私たちは、友人三人の第二ラウンドの議論に入っています。エリファズとビルダデが語り終え、ビルダデの主張に対してヨブが反論して、ヨブは最も落ち込みました。友がヨブをさらに追い打ちをかけることを言ったからです。ヨブが悪者であることを前提にして話し、悔い改めないの神に裁かれて滅ぶことを話しました。そこでヨブは、神から酷い仕打ちを受けていると不平を漏らし、近しい人々からも見捨てられていると嘆きました。

しかし、激しく友人たちを詰りながら独白している中で、信じられないぐらいの大胆な告白を彼は行いました。「私は知っている。私を贖う方は生きておられ、後の日に、ちりの上に立たれることを。私の皮が、このようにはぎとられて後、私は、私の肉から神を見る。この方を私は自分自身で見る。私の目がこれを見る。ほかの者の目ではない。私の内なる思いは私のうちで絶え入るばかりだ。(ヨブ 19:25-27)」ここまではっきりと自分の贖い主を見たことによって、これまでの議論とは話の流れが変わってきます。

ヨブは、友人たちが悪意をもって議論で追いつめようとしていると言い、それに対する神の裁きがあると告げました。その次にツォファルは話します。

1A 新たな疑問 20-21

1B 悪者の速やかな滅び 20

20:1 そこでナアマ人ツォファルは答えて言った。20:2 それで、いらだつ思いが私に答えを促し、そのため、私は心あせる。20:3 私の侮辱となる訓戒を聞いて、私の悟りの霊が私に答えさせる。

ツォファルは、ヨブが何度となく友人がいかに役立たずの慰め手であるか、その詰る言葉を侮辱と受けとめました。それで心が焦り、苛立ち、「悟りの霊」と言っていますが、自分の主張したいことを一気に話し始めます。

20:4 あなたはこのことを知っているはずだ。昔から、地の上に人が置かれてから、20:5 悪者の喜びは短く、神を敬わない者の楽しみはつかのまだ。

ツォファルは、ヨブが一気にその富が取られたことを意識しながら、悪者は速やかに滅びると言っています。

20:6 たとい彼の高ぶりが天まで上り、その頭が雲まで及んでも、20:7 彼は自分の糞のようにとこしえに滅びる。彼を見たことのある者たちは言う。彼はどこにいるのかと。20:8 彼は夢のように飛び去り、だれにも彼は見つけられない。彼は夜の幻のように追い払われ、20:9 彼を見慣れていた目は再び彼を見ず、彼のいた所はもはや彼を認めない。

どんなに栄えても、跡形もなくなるということです。

20:10 彼の子らは貧民たちにあわれみを請い、彼の手は自分の財産を取り戻さなければならぬ。20:11 彼の骨が若さに満ちても、それも彼とともにちりに横たわる。

子たちにも、悪者に対する裁きが及ぶということです。そして本人はどんなに若さに満ちていたとしても、塵に横たわる、すなわち死んでしまいます。

20:12 たとい悪が彼の口に甘く、彼がそれを舌の裏に隠しても、20:13 あるいは、彼がこれを惜しんで、捨てず、その口の中にとどめていても、20:14 彼の食べた物は、彼の腹の中で変わり、彼の中でコブラの毒となる。20:15 彼は富のみこんでも、またこれを吐き出す。神がこれを彼の腹から追い払われる。20:16 彼はコブラの毒を吸い、まむしの舌が彼を殺す。

悪事というのは、隠しているものです。口までその悪意というのは来ているのですが、そこから先は出さないで人々をだまします。しかし、神がその悪意を毒のようにして本人に及ぼすということです。

20:17 彼は川を見ることがない。すなわち、蜜と凝乳の流れる川を見ることがない。20:18 彼は骨折って得たものを取り戻しても、それをのみこめない。商いで得た富によっても楽しめない。20:19 彼が寄るべのない者を踏みにじって見捨て、自分で建てなかった家をかすめたからだ。20:20 彼の腹は足ることを知らないので、欲しがっている物は何一つ、彼はのがさない。20:21 彼のむさぼりからのがれる物は何一つもない。だから、彼の繁栄は続かない。

17 節の「蜜と凝乳の流れる川」というのは、豊かさをもたらす川ということです。イスラエルの約束の地が「蜜と乳の流れる地」でしたよね。富を得てもそれを楽しむことはない、と言っています。理由は、経済的弱者を虐げたからだということです。もちろんヨブのことを意識して言っています。

エリファズとビルダデもそうでしたが、ヨブが富んでいた時にそれを行っていたのだと決めつけています。

20:22 満ち足りているときに、彼は貧乏になって苦しみ、苦しむ者の手がことごとく彼に押し寄せる。20:23 彼が腹を満たそうとすると、神はその燃える怒りを彼の上を送り、憤りを彼の上而降らす。20:24 彼は鉄の武器を免れても、青銅の弓が彼を射通す。20:25 彼がそれを引き抜くと、それは彼の背中から出る。きらめく矢じりが腹から出て、恐れが彼を襲う。

貧しさに加えて神の怒りが押し寄せると言っています。そして、ヨブが自分の苦しみを「神は私の内蔵を容赦なく射抜き、私の胆汁を地に流した。(16:13)」と言いましたが、そのことを使って神の怒りが現れると話しています。

20:26 すべてのやみが彼の宝として隠され、人が吹きおこしたのではない火が彼を焼き尽くし、彼の天幕に生き残っているものをもそこなってしまう。20:27 天は彼の罪をあらわし、地は彼に逆らって立つ。20:28 彼の家の作物はさらわれ、御怒りの日に消えうせる。20:29 これが悪者の、神からの分け前、神によって定められた彼の相続財産である。

天と地が証人となって、彼はこの地上で厳しい裁きを受けるということです。ツォファルも他の二人の友人と同じように、第一ラウンドの時は悔い改めと回復を語ったのですが、悔い改めていないと判断したので、このように裁きの宣言だけで終わっています。

2B 生きながらえる悪者 21

21:1 ヨブは答えて言った。21:2 あなたがたは、私の言い分をよく聞け。これをあなたがたの私への慰めとしてくれ。21:3 まず、私が語るのを許してくれ。私が語って後、あなたはあざけてもよい。21:4 私の不平は人に向かってであろうか。なぜ、私がいらだってはならないのか。

ツォファルの激しい言葉に対して、驚くことにヨブの口調が柔らかくなっています。ヨブは、エリファズに対しては、「そのようなことを、私は何度も聞いた。あなたがたは、煩わしい慰め手だ。(16:2)」と言いました。ビルダデに対しては、「もう十度もあなたがたは、私に恥ずかしい思いをさせ、恥知らずにも私をいじめる。(19:3)」と言いました。これまでは、自分こそが我慢しているのという気持ちでいっぱいでしたが、今は相手の気持ちに立って話そうとしています。

何がそんなに変えたのか？ヨブが、信仰によって贖い主を見たからです。彼の実存的苦しみは、自分の肉で、地上に立つ贖い主、神ご自身を見ることになるという確信が、わずかな間でも与えられていたことによって、その心に余裕と豊かさが幾分与えられたからです。このように、神との新たな出会いをすることによって、私たちは心が自ずと広くなります。その根底には「愛」があります。ヨブは主を信仰によってみたので、その小さな愛が芽生えたのでした。

21:5 私のほうを見て驚け。そして手を口に当てよ。21:6 私は思い出すとおびえ、おののきが私の肉につかみかかる。

友人たちは言葉の議論の中に入ったのですが、ヨブは再び思い起こさせています、目をそむけたくなるような顔をしていました。自分自身でも、自分の肉体の状態を思い出すと慄くほどです。私たちが言葉の議論をしていると忘れてしまうのが、現実です。目の前で、その語っているものの当事者がいることを忘れてしまうのです。当事者がいることを知って語る言葉は変わってきます。その言葉は空回りすることなく、重みを持つことができるのです。

21:7 なぜ悪者どもが生きながらえ、年をとっても、なお力を増すのか。

ヨブは、新たな領域に突入しています。これまでは、正しい者がどうしてこのように苦しまなければいけないのか？という問いかけでした。けれども今度は、悪者がどうして長く、平穩に生きることができるのか？という問いであります。ツォファルは、悪者はすみやかに滅びると言いましたが、ヨブは、現実はどうだろうという問いかけをしているのです。

21:8 彼らのすえは彼らとともに堅く立ち、その子孫は彼らの前に堅く立つ。21:9 彼らの家は平和で恐れがなく、神の杖は彼らの上に下されない。21:10 その牛は、はらませて、失敗することがなく、その雌牛は、子を産んで、仕損じがない。21:11 彼らは自分の幼子たちを羊の群れのように自由にさせ、彼らの子どもたちはとびはねる。21:12 彼らはタンバリンと立琴に合わせて歌い、笛の音で楽しむ。21:13 彼らはしあわせのうちに寿命を全うし、すぐによみに下る。21:14 しかし、彼らは神に向かって言う。「私たちから離れよ。私たちは、あなたの道を知りたくない。21:15 全能者が何者なので、私たちは彼に仕えなければならぬのか。私たちが彼に祈って、どんな利益があるのか。」と。

これほどまでに平穩に生きているのに、神を全く度外視しているのです。覚えていますが、詩篇73篇において、礼拝賛美を導くアサフはこの悩みを持っていました。ちょっと長いですが読んでみます。「まことに神は、イスラエルに、心のきよい人たちに、いつくしみ深い。しかし、私自身は、この足がたわみそうで、私の歩みは、すべるばかりだった。それは、私が誇り高ぶる者をねたみ、悪者の栄えるのを見たからである。彼らの死には、苦痛がなく、彼らのからだは、あぶらぎっているからだ。人々が苦勞するとき、彼らはそうではなく、ほかの人のようには打たれない。それゆえ、高慢が彼らの首飾りとなり、暴虐の着物が彼らをおおっている。彼らの目は脂肪でふくらみ、心の思いはあふれ出る。彼らはあざけり、悪意をもって語り、高い所からしいたげを告げる。彼らはその口を天にすえ、その舌は地を歩き巡る。それゆえ、その民は、ここに帰り、豊かな水は、彼らによって飲み干された。こうして彼らは言う。「どうして神が知ろうか。いと高き方に知識があろうか。」見よ。悪者とは、このようなものだ。彼らはいつまでも安らかで、富を増している。(1-12節)正しい者が苦しむのも、私たちには苦痛を与えますが、悪者が栄えるのにも私たちは苦痛を感じます。

21:16 見よ。彼らの繁栄はその手の中にある。悪者のはかりごとは、私と何の関係もない。

つまり、繁栄は人によるものではなく、神の御手の中にあります。神が、その富を持ち去ろうと思えば一夜にして持ち去ることができます。そしてヨブは、この悪者の働きに一切関わっていないと念を押しています。

21:17 幾たび、悪者のともしびが消え、わざわいが彼らの上を下り、神が怒って彼らに滅びを分け与えることか。21:18 彼らは、風の前のわらのようではないか。つむじ風に吹き去られるもみからのようではないか。

本来なら、悪者はこのように瞬く間に拭き去られなければいけない存在です。

21:19 神はそのような者の子らのために、彼のわざわいをたくわえておられるのか。彼自身が報いを受けて思い知らなければならぬ。21:20 彼の目が自分の滅びを見、彼が全能者の憤りをのまなければならぬ。21:21 彼の日の数が短く定められているのに、自分の後の家のことに何の望みがあるのか。

ヨブは、ツォファルが言った子供たちの苦しみに対して反論しています。20章10節で彼は、「彼の子たちは貧民たちにあわれみを請い」とありました。悪者の悪はその者の頭上に降りかかります。エゼキエル書18章はこのことを詳しく語っています。4節だけ読みますが、「見よ、すべてのいのちはわたしのもの。父のいのちも、子のいのちもわたしのもの。罪を犯した者は、その者が死ぬ。」

21:22 彼は神に知識を教えようとするのか。高い所におられる方がさばきを下すのだ。

つまり、悪者は滅びなければいけないはずなのに、それがなかなか、なされない。だから、神に裁かれるべきだと知識を教えようとするのか、と反語的に聞いています。けれども、もちろん高き所におられる神のみが、誰を裁くかという権利を持っておられます。

21:23 ある者は元気盛りの時に、全く平穩のうちに死ぬだろう。21:24 彼のからだは脂肪で満ち、その骨の髄は潤っている。21:25 ある者は苦悩のうちに死に、何の幸いも味わうことがない。21:26 彼らは共にちりに伏し、うじが彼らをおおう。

ヨブ自身も、悪者は速やかに滅ぼされなければいけないと思うのですが、しかし、実際はそうならない場合もあるということです。

21:27 ああ、私はあなたがたの計画を知っている。私をそこなおうとするたくらみを。21:28 あな

たがたは言う。「権門の家はどこにあるか。悪者の住んだ天幕はどこにあるか。」と。

友人たちが尋ねてきそうな問いかけを、先手を打って自ら尋ねています。「悪者の家や天幕はどこにあるのか、ないではないか」と。

21:29 あなたがたは道行く人に尋ねなかったか。彼らのあかしをよく調べないのか。21:30 「悪人はわざわざの目を免れ、激しい怒りの日から連れ出される。」という。21:31 だれが彼に面と向かって彼の道を告げようか。だれが彼のなしたことを彼に報いようか。21:32 彼は墓に運ばれ、その塚の上には見張りが立つ。21:33 谷の土くれは彼に快く、すべての人が彼のあとについて行く。彼より先に行った者も数えきれない。

友人たちは自分たちの知っている矮小化された生活圏内では、悪者の天幕は見つからないのかもしれないけれども、他の一般人のほうがよっぽど悪人が平穩のうちに死んでいることを知っていると言っています。私たちはとかく、信仰について神学について議論をしていると忘れるのが、道行く人々の観察です。つまり、普通にしていれば当たり前に見えている現実を、自分たちの頭脳の体系の中で見えないようにさせていることです。

21:34 どうしてあなたがたは、私を慰めようとするのか。むだなことだ。あなたがたの答えることは、ただ不信実だ。

そうですね、現実にある世界があって、そこから来る問いに対して、共に悩むことをしないで、自分の知っている聖書知識を振りかざしているならば、私たちも不信実な慰めを与えることになりません。

2A 神への訴え 22-24

さて、友人たちとの論争は第二弾が終わりました。第三弾に入ります。最年長者エリファズからです。

1B 富者の虐げ 22

22:1 テマン人エリファズが答えて言った。22:2 人は神の役に立つことができようか。賢い人さえ、ただ自分自身の役に立つだけだ。22:3 あなたが正しくても、それが全能者に何の喜びであろうか。あなたの道が潔白であっても、それが何の益になろう。

エリファズの口調は、第二弾よりもさらに辛辣になっています。第二弾の時は、「知恵のある者はむなしい知識を持って答えるだろうか。東風によってその腹を満たすだろうか。(15:2)」であり、ヨブが知恵のある者であるはずなのに、という前提をもって話していました。ところが今は、「全能者の前では、お前の潔癖だといっている業など意味がない。」と言い放ちました。ヨブの主張を切り捨

てるような言い方です。

確かに、私たちが何か神に対して貢献するものはない、というのは真実です。私たちは神の義に何ら付け加えることはできません。神は私たちを必要としていません。しかし、神は私たちの一つ一つの営みに深い関心を寄せておられます。髪の毛一本でさえも、数えておられます。私たちを全く必要としていない神が、私たちを関わる事なくして物事を進められないのです。

22:4 あなたとともに、さばきの座に、はいつて行かれ、あなたを責められるのは、あなたが神を恐れているためか。22:5 いや、それはあなたの悪が大きくて、あなたの不義が果てしないからではないか。

これは、ヨブが何度も言っていたことでした。さばきの座に入って神と論じ合いたい、自分の潔白に対して神がどう答えてくださるのか？ということです。けれども、エリファズはきっぱりと、そんな試みを止めてしまえと言っています。あなたの悪が大ききから、不義が果てしないから、神から責められて苦しんでいるのではないか、ということです。

22:6 あなたは理由もないのにあなたの兄弟から質を取り、裸の者から着物をはぎ取り、22:7 疲れている者に水も飲ませず、飢えている者に食物を拒んだからだ。22:8 土地を持っている有力者のように、そこに住む有名人のように、22:9 あなたはやもめを素手で去らせ、みなしごの腕を折った。22:10 それでわながあなたを取り巻き、恐れが、にわかあなたを脅かす。22:11 あるいは、やみがあって、あなたは見ることもできず、みなぎる水があなたをおおう。

エリファズは、第三弾においてついに、でっち上げの訴状をヨブに作り上げてしまいました。第一弾においては、「苦しんでいるのは、原因あつてのことだ。不義があるからこそ、苦しむのだ。」という、彼の信じている一般真理でありました。第二弾は、ヨブが悔い改めないものだから、「ならば、悪者のように滅ぶ」という、ヨブに対するその真理の適用でありました。しかしヨブが、それでも潔癖を主張しました。そこでエリファズは、ヨブが、これこれの悪を行なったという具体的な罪を挙げています。

これは恐ろしいことですが、起こり得ます。自分が、これが絶対にそうであるという信条や主張があります。けれども現実はそのようではありません。それなのに、その信条や主張が正しいとして現実から目を逸らすと、自分の思いの中でその主張を支持するための事例を考えだします。そして、それらが自分の作り出したものなのに、事実だと思ってしまうのです。こうして私たちは、偽りの告発、誤った裁きを行ってしまいます。パリサイ人や律法学者がイエス様に対して行なったことは、全てがこれでした。

22:12 神は天の高きにおられるではないか。見よ、星の頂を。それは何と高いことか。22:13 あ

なたは言う。「神に何がわかろうか。黒雲を通してさばくことができようか。22:14 濃い雲が神をおおっているの、神は見るができない。神は天の回りを歩き回るだけだ。」と。

ヨブは、そんなことを言ったことはありません。確かに彼は、神が正しい裁きをしてくださらないことを嘆きました。しかし、それは神が裁く能力を持っていないということではありません。

22:15 あなたは悪人が歩いたあの昔からの道を守っていこうとするのか。22:16 彼らは時がまだ来ないうちに取り去られ、彼らの土台は流れに押し流された。22:17 彼らは神に向かって言った。「私たちから離れよ。全能者が私たちに何ができようか。」と。22:18 しかし、神は彼らの家を良い物で満たされた。だが、悪者のはかりごとは私と何の関係もない。22:19 正しい者は見て喜び、罪のない者は彼らをあざけて言う。22:20 「まことに、私たちに立ち向かった者は滅ぼされ、彼らの残した物は火が焼き尽くした。」

このような速やかな裁きは、ノアの時代の洪水の時だろうかと言われています。そのような悪者の一掃についてエリファズは話しています。17-18 節は、ヨブが先ほど 15-16 節で言ったことですが、それを嘲笑うかのように悪者が滅びるという言葉で押しつぶしています。しかも、ヨブが悪者ではないと言った言葉を使って、彼も悪者として滅ぼされると言っているのです。

22:21 さあ、あなたは神と和らぎ、平和を得よ。そうすればあなたに幸いが来よう。22:22 神の御口からおしえを受け、そのみことばを心にとどめよ。

エリファズは、悔い改めを説きました。

22:23 あなたがもし全能者に立ち返るなら、あなたは再び立ち直る。あなたは自分の天幕から不正を遠ざけ、22:24 宝をちりの上に置き、オフィルの金を川の小石の間に置け。22:25 そうすれば全能者はあなたの黄金となり、尊い銀があなたのものとなる。

悔い改めは、具体的な行動を伴います。バプテスマのヨハネも、「下着を二枚持っている者は、一つも持たない者に分けなさい。(ルカ 3:11)」と言いましたが、具体的です。ヨブの場合は、その富を使って人々を虐げたのだから、その富によって償いなさいということでもあります。オフィルの金はアラビア半島南部で採掘される金ですが、高価なものです。ただこれだけのために、これだけの苦しみを味わっているのだから、これを差し出しなさいと言っているのです。

22:26 そのとき、あなたは全能者をあなたの喜びとし、神に向かってあなたの顔を上げる。22:27 あなたが神に祈れば、神はあなたに聞き、あなたは自分の誓願を果たせよう。22:28 あなたが事を決めると、それは成り、あなたの道の上には光が輝く。22:29 あなたが低くされると、あなたは高められたと言おう。神はへりくだる者を救われるからだ。22:30 神は罪ある者さえ救う。その人

はあなたの手のきよいことによって救われる。

すばらしい回復の約束です。ここに書いてあることは、他の聖書箇所と比べても実に真理であります。しかし問題は、それがヨブに当てはまらないことです。

2B 反応しないヨブ 23-24

1C 神との討論 23

23:1 ヨブは答えて言った。23:2 きょうもまた、私はそむく心でうめき、私の手は自分の嘆きのために重い。23:3 ああ、できれば、どこで神に会えるかを知り、その御座にまで行きたい。23:4 私は御前に訴えを並べたて、ことばの限り討論したい。23:5 私は神が答えることばを知り、私に言われることが何であるかを悟りたい。

再びヨブの反応は、これだけの酷い告発を受けた直後であるのに、冷静です。エリファズと言い争いことはありませんでした。ヨブの心は神へとそのまま向かっています。ある注解には、「弱い犬ほどよく吠える」という言葉が引用されていました。ヨブが、友人から慰めが得られると思っていたところがそうではなかったので、能無し医者であるとか、激しい言葉をぶつけましたが、今や贖い主が終わりに地上に立ち、神を自分の肉で見ると宣言したヨブに、一定の心の平安があります。

そして彼は、御座にまで行き、そこで神に会いたいと願いました。そこでならば、討論ができるからと言っていきます。彼と御座との間には大きな距離があります。思い出すのは、ヤコブが見た夢です。天からのほしごです。後にイエス様が、人の子の上に御使いが上り下りをすると言われました。そして今や、キリストにあつて私たちは御座にそのまま近づくことが許されています。「罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、..あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。..キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。(エペソ 2:5-6)」天の所に共に座らせていただいたのですから、そのまま神に向かうことができます。しかしヨブには、まだそのような恵みが与えられていません。

23:6 神は力強く私と争われるだろうか。いや、むしろ私に心を留めてくださろう。23:7 そこでは正しい人が神と論じ合おう。そうすれば私は、とこしえにさばきを免れる。

神と討論しても、自分の潔癖は証明できるから、裁きは免れるだろうという確信を持っています。

23:8 ああ、私が前へ進んでも、神はおられず、うしろに行っても、神を認めることができない。23:9 左に向かって行っても、私は神を見ず、右に向きを変えても、私は会うことができない。23:10 しかし、神は、私の行く道を知っておられる。神は私を調べられる。私は金のように、出て来る。23:11 私の足は神の歩みにつき従い、神の道を守って、それなかった。23:12 私は神のくちびるの命令から離れず、私の定めよりも、御口のことばをたくわえた。

ヨブは、論じることのできるような神の臨在を知ることはできませんでした。しかし、神は自分の道を知っておられるという確信を持っています。私たちはとかく、自分がどれだけ神を知っているのか、そのことだけに焦点を当てて悩みます。自分がそこまで臨在を感じることはできていないと思います。しかし、忘れてはいけないのは神に知られているということです。「今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には顔と顔とを合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります。(1コリント 13:12)」

そしてヨブは、主に知られているから、自分の潔癖さが証明されるだろうとしました。

23:13 しかし、みこころは一つである。だれがそれを翻すことができようか。神はこころの欲するところを行なわれる。23:14 神は、私について定めたことを、成し遂げられるからだ。このような多くの定めが神のうちにある。23:15 だから、私は神の前でおびえ、これを思って、神を恐れているのだ。23:16 神は私の心を弱くし、全能者は私をおびえさせた。23:17 私はやみによって消されず、彼が、暗黒を私の前からなくされたからだ。

自分の潔癖さが何であろうと、神には定めがあって、その定めに従ってこの苦しみを受けているのだということです。そのことを思うと、神の前でおびえて恐れている、ということでもあります。そして、やみ、つまり死を迎えようと思っても、それが近づいてこない苦しみであります。

2C 正義のない世界 24

24:1 なぜ、全能者によって時が隠されていないのに、神を知る者たちがその日を見ないのか。

ヨブの訴えは、不正に対する神の裁きの時です。神を知る者たちにとって、なぜ神の正義が行われる日を見ることはないのか、と問いかけています。これは、私たち人間が共通して持っている神への訴えです。誰もが正義を求めています。具体的には、正義というのは主に二つに別れるでしょう。一つは富の公正な配分です。貧しい者がいるのに、富が一部に集中しています。もう一つは、損害賠償です。損害を与えた者がきちんと償うところにも正義があります。これは、私たち人間にDNAのように組み込まれています。

多くの人が、神が裁き主である話をするとき抵抗を覚えています。裁くこと、地獄に送ることを考えたくないからです。けれども、人は誰もが愛を欲しているのと同じように、正義が行われることを欲しています。悪を見て、それが公正に裁かれることを求めます。

24:2 ある者は地境を動かし、群れを奪い取ってこれを飼い、24:3 みなしごのろばを連れ去り、やもめの牛を質に取り、24:4 貧しい者を道から押し除ける。その地の哀れな人々は、共に身を隠す。

エリファズが先ほど言及した不正、すなわち貧しい者から巻き上げる悪について話しています。初めの「地境を動かす」というのは、申命記 19 章 14 節にある掟です。「あなたの神、主があなたに与えて所有させようとしておられる地のうち、あなたの受け継ぐ相続地で、あなたは、先代の人々の定めた隣人との地境を移してはならない。」昔は、ただ石が置いてあるだけですから、石を動かせば地境は移すことができます。そのことで、こうした不正を行なうということです。

24:5 見よ。荒野の野ろばを。彼らは、出て行き、荒れた地で獲物を求めて捜し回り、自分の子らのためにえさを求める。24:6 飼葉を畑で刈り取り、悪者のぶどう畑をかすめる。24:7 彼らは着る物もなく、裸で夜を明かし、寒さの中でも身をおおう物がない。24:8 山のあらしでずぶぬれになり、避け所もなく、岩を抱く。

ここで言っている「荒野の野ろば」というのは、野ろばのような者たちということです。つまり、貧しさへ追いつめられた者たちが、これだけひどい思いをしているということでもあります。6 節の後半は新共同訳では、「悪人のぶどう畑で残った房を集める。」となっています。

24:9 彼らはみなしごを乳房からもぎ取り、貧しい者の持ち物を質に取る。24:10 彼らは着る物もなく、裸で歩き、飢えながら麦束をになう。24:11 その植え込みの間で油をしぼり、酒ぶねを踏みながら、なお渇く。24:12 人の住む町からうめき声が起り、傷ついた者のたましいは助けを求めて叫ぶ。しかし、神はその愚痴に心を留められない。

搾取がこのように行われているのに、神がその叫びに耳を傾けておられるように思えない、ということですが。

24:13 これらの者は光に反逆する者で、光の道を認めず、また、その通り道にとどまらない。24:14 人殺しは、夜明けに起き上がり、哀れな者や貧しい者を殺し、夜には盗人のようになる。24:15 姦通する者の目は夕暮れを待ちもうけ、「私に気づく目はない。」と言い、その顔におおう物を当てる。24:16 彼は暗くなってから、家々に侵入する。昼間は閉じこもって光を知らない。24:17 すべて彼にとっては暗黒が朝である。彼は暗黒の恐怖と親しいからだ。

12 節までは富の配分にある不正でしたが、13 節からは損害賠償に関わる正義であります。人殺し、盗み、そして姦淫であります。これらを白昼で行おうとはせず、暗闇の中で行ないます。なぜなら、光によって悪い行いが明らかにされるからです。使徒ヨハネもこう言いました。「そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行ないが悪かったからである。悪いことをする者は光を憎み、その行ないが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。(ヨハネ 3:19-20)」

24:18 彼は水の面をすばやく過ぎ去り、彼の割り当ての地は国の中でのろわれる。彼はぶどう畑

の道のほうに向かわない。24:19 ひでりと暑さは雪の水を奪い、よみは罪を犯した者を奪う。24:20 母の胎は彼を忘れ、うじは彼を好んで食べ、彼はもう思い出されない。不正な者は木のよう折られてしまう。

これは、ヨブが正しいとみなしている、これら悪を行なう者たちに対する神の正義です。彼がこのような形で呪われることを願います。しかし現実はどうではありません。

24:21 彼は子を産まない不妊の女を食いものにし、やもめによくしてやらない。24:22 しかし、神は力をもって暴虐な者たちを生きのびるようにされる。彼はいのちがあるとは信じられないときにも立ち上がる。24:23 神が彼に安全を与える。それで、彼は休むことができる。神の目は彼らの道の上に注がれる。24:24 彼らはしばらくの間、高められるが、消えうせる。彼らは低くされ、ほかのすべての者と同じように刈り集められる。麦の穂先のように枯れてしまう。

不妊の女ややもめという弱者を食い物にしている、そのような者たちが普通に生き延びるようにされている、安全で、休むことができ、そして普通に死んでいく。そうであってほしくないのですが、これが現状だということです。

24:25 今そうでないからといって、だれが私をまやかし者だと言えよう。だれが私のことばをたわごとにしようとするのか。

つまり今、正しいヨブが報いを受けているようには見えないで、悪者が滅びていないように見えるけれども、その観察によってどうして私が嘘を言っているといえるのか？ということです。こうしてヨブは、現状分析をしました。悪者が栄えている場合がある。神の正義の日はいつなのか？ということでもあります。

私たちが気をつけなければいけないのは、一見矛盾する現実から目を離さないことです。現実を見る勇気がなければ、私たちはいつまでも友人のように神について真実を語ることはできません。もちろん、正確な神の知識を話すことはできるかもしれませんが、現実から遊離し、実に謝った判断や、偽りの告発をさえできるのです。いくらそれが不条理に見えても、私たちは目をつむってはいけません。そこに初めて、私たちは語る言葉を持つことができ、また聖書の知識も役に立つのです。